九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520772

出版情報：九州大学新聞. 589, 1969-02-25. 九州大学新聞部
バージョン：
権利関係：

KYUSYU UNIV. 44.3.7 LIBRARY

九州大學新聞
発行所 福岡市箱崎町 九州大学新聞部
電話(64)1101
振替福岡13103
4頁20円・2頁10円
年400円・半年200円
発行人 並木民夫

医学部確認書を取交す

五日間のスト闘争実施

学生の拒否権などを要求

医学部

医学部自治会は、二月六日の学生を中心議題とする医学部学生大会において、国大協路線粉砕など四つのスローガンと三つの要求を掲げて二月七日にわたりストライキ闘争に入ることを決定し、二月十一日、それを解除した。

二月末以来、自治会員会は、国大協路線粉砕・無給医"制度"粉砕・沖縄闘争勝利・板付基地撤去のスローガンと次の三つの要求を掲げて二週間のストを行なうことを提起、各クラスの討論を呼びかけていた。

一、一・五事件の真相を徹底的に究明し、全学的に明らかにせよ

一、大学当局は七・九以後の一切の言動を自己批判し、七・九決定を自己撤回せよ。

一、学長選に学生の拒否権を認めよ。学長、評議会決定に対する拒否権を認めよ。

二月四日、この自治会員会の提案が、討論後採決の結果、賛成多数で可決され、②は否決された。最後に学友会代議員の選挙が行なわれ二日午前時頃閉会した。尚学友会代議員の氏名は記事参照。

確認書をめぐって混乱する教授会（2月10日医学部中央講堂の団交席上にて）

医学部でスト期間中、二月七日、主に行なわれた。

八日、十日の三回にわたって自治会と教授会の間で団体交渉が行なわれ、穏便にされていた「板付基地人身影響調査」に関する追及が、そして、十日の団交は「板付基地人身影響調査」を自己批判する旨の三点にわたる確認書（河田直彦学部長代理（箇田直彦学部長病気療養中）が署名、取交した。確認書の全文は次の通り。

一、板付基地は、福岡市民及び九大に対して巨大な被害を与えてきた。この板付基地を維持してきた防衛施設局と関係した研究を「この九大医学部に於て行なってきし、しかも公開しなかった事を自己批判し、全九大及び全

板付人身影響調査を追求

教授会非公開を自己批判

九大人に謝罪する。

二、九州大学医学部教授会は今まで防衛施設局より福岡市を通じて依頼され板付基地人身影響調査に関するすべての資料、データを全市民及び全九大に公開する。

三、今後一切の防衛施設局との取引的、間接的関係を断ち切る。

以上を二月六日後七時三五分、中央講堂における学生と教授会との団交の席上確認する。

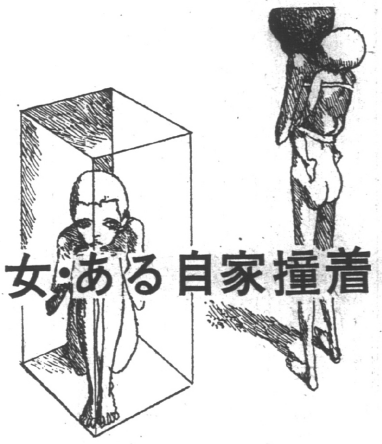
十三教官学園を去る

関 計夫（教育学部）
東京都出身、六十四才。昭和九年東京高等学校卒業。東京帝大文学部哲学科卒。昭和十一年四月教授。専門は教育心理学。著書は『新心理学』『教育心理』『児童心理』『教育心理』『教育学』『教育心理』『教育心理』『教育心理

女ある自家撞着

書評 女性残酷物語

瓜生久子



はじめに

何故私は書評等書くはめに陥ったのだろう。私の体の中からケのようにじみ出すかのように見える無音のうめきと、私のまわりを浮遊している無数の言葉……その言葉に手足や首や腰をかじられながらうめきを引きづって私は何故どこに行こうとしているのか。ある意味では愚かい悲しみとか云いようのない私のうめきの真実性は私だけ固有で必要なものとするなら、もし私が身を殺ぐようにうめきを絞り出したとしても一体だれがそんなものをもう一度必要とするだろう。そんな、私が書くことの原初的な問いかけが私にも多く定かでないモノローグ以前の肉の痛みの占有地帯にすぎぬような所に私はいる。だから書く言葉以前の「何故書くのか」という問と「書くことが何かあるのか」という問の前で拠るべき所もわからずオロオロと出てくる言葉をつなぎ合わせてみるしか私にとって今書くということはないようである。

これで女は生きられるか

さて女性残酷物語には、9篇合わせて女達の個別的体験が少数の例外を除いて男女の書き手を通じて語られている。ここでは私自身の限られてきた乏少な生と私のが直接向う底辺の女から学ん

モノローグの世界に閉ざされる女達

自己撞着の薄さと苦さを噛む

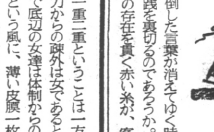
石井次郎

葬られる私有化された体験

親類三代にわたって雪の峠を命がけでこえた出稼ぎに行った飛騨の女はいう、「楽しかったことは何かに書きしるしておきたい。それは忘れやすいから。それに比べて苦しかったことは書きしるしておかなくても決して決して忘れ去ることがない」と。書きしるされることのない、だから書かれざる無言の暗闇の中で何かを絞りつづけてきたであろう女達。しかし私達のそしり、嘲笑さも、全生活が無数にコマギレ的に分断されるという形で商品化された資本主義の論理に逆にトータルに拘束されていってる現在、外からはどんな女達を女工哀史と続びつけて考える人もいなくなり、生爪をはがれるような女達の苦しみはただかコンクリートの四帖半から突出しているわけである。そしてつかんだと思った言葉と思想がも正銘のワラにでも似ているとしたら、それこそ断末魔的に愚かしく悲しい逆説ではないか。そんな思いが一瞬のうちに私を突っ切ったのである。そしてそんな風に私は私と新聞を睨みつづけるしかないのである。

自己を支え続ける言葉はあるか

ここで私はクラクラとうんめるようにはじめのあの慶喜な問に帰ってくるのだ。「これで女達は生きられるか」と問った所である意味では人は書いても書いても書かれても書かれても言葉によって救われはしない。私達の貧なる貧因というある欠如は例えば肉体の欠如のように干の言葉で埋めても、どこまでも欠如であるということが一方に厳であるのだ。言葉は他は浅い、いやもっと正確には言葉は生きられるか」と問った所である意味では人は書いても書かれても書かれても言葉によって救われはしない。私達の貧なる貧因というある欠如は例えば肉体の欠如のように干の言葉で埋めても、どまでも欠如であるということが一方に厳であるのだ。言葉は他は浅い、いやもっと正確には言葉は生きられるか」と問った所である意味では人は書いても書かれても書かれても言葉によって救われはしない。私達の貧なる貧因というある欠如は例えば肉体の欠如のように干の言葉で埋めても、どまでも欠如であるということが一方に厳であるのだ。言葉は他は浅い、いやもっと正確には言葉は生きられるか」と問った所である意味では人は書いても書かれても書かれても言葉によって救われはしない。私達の貧なる貧因というある欠如は例えば肉体の欠如のように干の言葉で埋めても、どまでも欠如であるということが一方に厳であるのだ。言葉は他は浅い、いやもっと正確



底辺共同体の無名の女達

肉の痛みの占有地帯への回帰

六面より続く

創刊昭和二年、紙令589
九州大学新聞
定期予約購読のおすすめ
▶半年=200円・1年=400円(郵送)
▶入学時4年契約=800円(ボックス)
福岡市箱崎九州大学構内
振替(福岡)13103番
電話(福岡092)(64)1101内線5266番
九州大学新聞

広告のため非表示

雑感

初期マルクス研究

―H・マルクーゼ・著

望月 浩

昨年の秋、倫理研究室を中心に、『経済学―哲学手稿の解釈』(H・マルクーゼ)の第一章まで、の研究会を催した。一八四四年に書かれたマルクスの遺稿、『経済学―哲学手稿』を今まで読んできた人が倫理には頭と多く、ちょっと角度を変えて、他の人の『経哲手稿』(初期マルクス)の読み方を検討してみたらおもしろいのではないかという、軽い気持で企画したものである。私自身そんなに期待していなかったが、今まで読んだ初期マルクス関係の著書(あまり読んでいないのであるが)のなかではおもしろいものであった。しかし、厳密さがたりないし何かものたりなさをおぼえた。

というのは、私は現在の私自身及び世界の混迷と苦悩に満ちた内的外的状況の中で、いわば共に放浪の後の、愛憎、思索、沈潜のつらい、ピーンと糸を張ったような年月を生きようとしている。ドレ」の20世紀初頭の詩人、ライナー・マリヤ・リルケが語っているような、それを生きる為には非常な困難が身につきまとう、孤独を生きている。事柄そのものに、直に触れ、それにつき動かされ、それを視し、学び、理解し、言い表す作業には不可欠の、つつましやかで、強大な、孤独を、わが身に持続させようと忍耐し、待っている。私は私という存在、人間存在の究極始源の存在構造へ、私の目が開かれる、私の耳が聞かれるという事態に遭遇している。私は私の人生の基礎であり目標である一点、私の生活の原動力が、こからわきだしてくる一点を透明にする作業、私という人間の自己の根源的存在構造を自己と世界に対して、明確に言い表す作業、哲学的神学的作業を遂行している。自己へ集中し、私自身の、この世界の根底的変革の基本的条件を、わが身に出現させようとしている。そして精神的生産(芸術、宗教、法、国家等々の形成のあり方の変革の軸を明確にし、精神現象、社会現象、自然現象の理解即批判即純化の試みに協力すると共に、物質的生産(自然発生的である。資本主義的生産様式という疎外労働体制)とその根本的変革、新しい、諸個人の意識的に自由な結合による、生産体制の建設創造の道へ出発しようとしている。

そこで、現在の言葉がは乱混沌している精神状況の克服、新生の為の理論的課題として、第一にマルクスよりも、もっと深く、自由な、人間存在のトータル な把握をめざし、人間存在の根底的存在構造を透明にすること、というのは、マルクスの人間の存在規定はなかなか理解しにくいし、マルクス自身の表現も、明晰さと、配慮を欠いているようだから。そのことは、我々の目が、耳が、西田幾多郎、サルトル、カール・バルト、ハイデガー、清沢満之、天才的な弘法大師等々の先達の哲学者、神学者の人間的世界へと生成するのが明らかに、この世界、この時代が提出している理論的課題は、私が教養部基礎、物質的生産と精神的生産の両面を含む広義生産労働の概念を確立し、精神的な生産(芸術、学問、宗教、法、国家等々の固有の構造、法則を明確にし、宇野弘蔵(経済学者)がやろうとしているように、「資本論」でなされている物質的生産の構造、原則、法則を透明、純化するということ。それらが我々につきつけられ、残されている。

そうでなければ、この私自身の、この世界の疎外状態が疎外状態として、肚に銘するように見えてこないし、疎外の構造が明確化されていない。

しかし、われわれはこうでも、だけであり、真理だけである。とは、教授会自治の厚い壁であり、管理面にまで、拡大された教官の権威であった。われらはこれと対決しなければならない。教授のネクタイをひっぱっても学生の理由にある。そして九大でもやはり事数が急激に、増大、拡大され、教官の権威するために大衆団交のエキサイトしたばっかりに、教授のネクタイをひっぱっても学生の理由にまで、駆え、大衆団交という手段に職員があるが、しかし、大学は学生が職員のネクタイをひっぱっても学生の理由にまで、駆え、大衆団交のエキサイトしたとめられたにすぎなかった。学生大学生の自治を守る道はそれ以外にない。わたしが九大にいい残したいのは、このことである。

(ぐま・かねさぶろう 法学部倫理学科修士課程一年)

マルクスの枠内での「経哲」解釈

自己存在を明確化する作業へ

H・マルクーゼ・著

望月 浩

『経済学―哲学手稿』(H・マルクーゼ)の第一章まで、の研究会を催した。一八四四年に書かれたマルクスの遺稿、『経済学―哲学手稿』を今まで読んできた人が倫理には頭と多く、ちょっと角度を変えて、他の人の『経哲手稿』(初期マルクス)の読み方を検討してみたらおもしろいのではないかという、軽い気持で企画したものである。私自身そんなに期待していなかったが、今まで読んだ初期マルクス関係の著書(あまり読んでいないのであるが)のなかではおもしろいものであった。しかし、厳密さがたりないし何かものたりなさをおぼえた。

というのは、私は現在の私自身及び世界の混迷と苦悩に満ちた内的外的状況の中で、いわば共に放浪の後の、愛憎、思索、沈潜のつらい、ピーンと糸を張ったような年月を生きようとしている。ドレ」の20世紀初頭の詩人、ライナー・マリヤ・リルケが語っているような、それを生きる為には非常な困難が身につきまとう、孤独を生きている。事柄そのものに、直に触れ、それにつき動かされ、それを視し、学び、理解し、言い表す作業には不可欠の、つつましやかで、強大な、孤独を、わが身に持続させようと忍耐し、待っている。私は私という存在、人間存在の究極始源の存在構造へ、私の目が開かれる、私の耳が聞かれるという事態に遭遇している。私は私の人生の基礎であり目標である一点、私の生活の原動力が、こからわきだしてくる一点を透明にする作業、私という人間の自己の根源的存在構造を自己と世界に対して、明確に言い表す作業、哲学的神学的作業を遂行している。自己へ集中し、私自身の、この世界の根底的変革の基本的条件を、わが身に出現させようとしている。そして精神的生産(芸術、宗教、法、国家等々の形成のあり方の変革の軸を明確にし、精神現象、社会現象、自然現象の理解即批判即純化の試みに協力すると共に、物質的生産(自然発生的である。資本主義的生産様式という疎外労働体制)とその根本的変革、新しい、諸個人の意識的に自由な結合による、生産体制の建設創造の道へ出発しようとしている。

そこで、現在の言葉がは乱混沌している精神状況の克服、新生の為の理論的課題として、第一にマルクスよりも、もっと深く、自由な、人間存在のトータル な把握をめざし、人間存在の根底的存在構造を透明にすること、というのは、マルクスの人間の存在規定はなかなか理解しにくいし、マルクス自身の表現も、明晰さと、配慮を欠いているようだから。そのことは、我々の目が、耳が、西田幾多郎、サルトル、カール・バルト、ハイデガー、清沢満之、天才的な弘法大師等々の先達の哲学者、神学者の人間的世界へと生成するのが明らかに、この世界、この時代が提出している理論的課題は、私が教養部基礎、物質的生産と精神的生産の両面を含む広義生産労働の概念を確立し、精神的な生産(芸術、学問、宗教、法、国家等々の固有の構造、法則を明確にし、宇野弘蔵(経済学者)がやろうとしているように、「資本論」でなされている物質的生産の構造、原則、法則を透明、純化するということ。それらが我々につきつけられ、残されている。

そうでなければ、この私自身の、この世界の疎外状態が疎外状態として、肚に銘するように見えてこないし、疎外の構造が明確化されていない。

しかし、「経哲」の原文はなかなか読むのに骨が折れるものだから、――特に類的存在ということばは――「経哲」理解への手引としては適当な面はあるし、少しは魅力あるものではないかろうか。「経哲」への何かの手がかりを得たり、そこでのマルクスの視点に近づき把むために。

H・マルクーゼのこの研究書の論の進め方からでも、一つの「経哲」への手がかりを示していると、序説のあと、一、疎外された労働、二、人間の存在規定、三、自由の実現としての労働、四、歴史の本質と事実状況、五、自己疎外の実践的上揚、六、ヘーゲル現象学の批判となっている。(私達の研究会では、五章までしか読んでいない。一応五章までも、要旨は理解できる。)序説から三章まで、は下向過程、四章、五章は上向過程ともみなせよう。

彼は序説で、マルクスが、国民経済の運動(資本主義経済の運動)から生じる私有財産の根源的起原の分析、疎外された労働の分析、彼の革命理論の前提とする、「国民経済学的な現存の事実」がいかなる事実であるか、よく注目するように注意している。

第一章、疎外された労働、では疎外された労働の分析、私有財産の起原の分析を貫いている、マルクスの人間存在の把握、人間存在の規定を注目することを通じている。まさに、この人間存在の把握は疎外された労働の分析の原動力である。

第二章、人間の存在規定、で人間の根底的な存在構造の問題――類的存在という問題にふれている。

第三章、自由の実現としての労働、で、人間労働の本質(本来的あり方)の規定という人間存在の機能というか作用といった面にふれ、以上により、疎外された労働がそこからいうと、その点からいうと疎外された労働と規定される点にふれている。

第四章、歴史の本質と事実状況、第五章、自己疎外の実践的止揚の章で、労働者(人間)の自分の生産物からの疎外、労働者(人間)の自分の労働活動からの疎外、労働者(人間)の類(類的存在)からの疎外、労働者(人間)の他の人からの疎外という四つの規定でその総体を形成し、規定される疎外された労働(人間)即ち、人間の自己疎外の止揚ということ。即ち、疎外された労働(人間)の直接の帰結であり産物である、私有財産の止揚ということ。即ち資本主義経済体制の止揚という革命理論の生成を述べている。

(もちづき・ひろし 文学部倫理学科修士課程一年)

九大を去る

反体制の大学へ

具島 兼三郎

景風が近づいている。用意はいま日本の反動勢力が、何をやりだろうか? 九大を去る日を前にして、わたしの心に軍ごのしかかっているのは、こうした思いである。老兵はただ消えゆくのみ、これを示している。今ではかつての大学法に輪をかけたような弦楽が、臆面もなく、かれらの口から語られるようになった。学長、学部長の権限を強化せよという主張は、大学法時代のそれをそのまま引継いだもので、格別新しいものもないが、教官の任免に関する拒否権を文部大臣にあたえるとか、問題のある大学を一時休校にするとか、行政官庁の介入を制度的に保障するとか、大学院大学にしても、その構想は、大学間に序列を設け、少数の特権大学をつくって、そこに予算を集中し、支配階級のために奉仕するエリート養成の機関にしようという意図がみえる。

もしもこのような案が実施されたら、今のどこまでも大学の中に残っている反体制の芽はつぶされてしまうであろう。大学のなかに、どんな存在理由があるのであろうか。大学の存在理由は未来を担う人間の育成にある。未来を担うべき教育は第六七条によれば、入試の決定は大学側でおこなうようになっているのに、東大の場合には、それ以前であったなら、大学側の反発をおそれて、用心に用心を重ねてやったことを、今では平気やってのけるようになり、平気口にするようになった。学校教育法第六七条によれば、入試の協問が大手をふって、大学のなかに横行しはじめたのである。それは一部教官のなかにおおよそ、裂のために、外圧に抗する力をいちじるしく、弱めたようにみえる。こうした事態は、常日頃大学が体制の基盤となることをおそれ、大学自治の主張を苦々しい思いでいきいてきた大学のなかにも、大の強調によっておこなわれたのであるから、それは法律論をこえた問題であるという感話が、文部省内部で発表されたが、それは、常識を超越した無視、体裁のよいことばでごまかすようなものである。

教官の権威は教官なるが故にあるのではない。教官の権威はかれらが学問に関して深い造詣をもっていることからくる権威であって、学問の無視、勇断のおとした影にすぎない。先ほどはやくきそうはいうこともない。

これまでのところ学生は、大学自治を基礎とする正義として、教官の取扱いをうけたことはなかった。大学は手おくれになるまいうちに、学内の民主化を推進面に目を向け、かれらの権利拡大をすすめることによって、早くこうきで、大学自治への参加をみ失われかけた教官と学生の信頼関係をとりもどすべきである。そしてみんなが力を合せて、外圧に抗する条件をつくることである。

(ぐま・かねさぶろう 法学部倫理 郷教授)

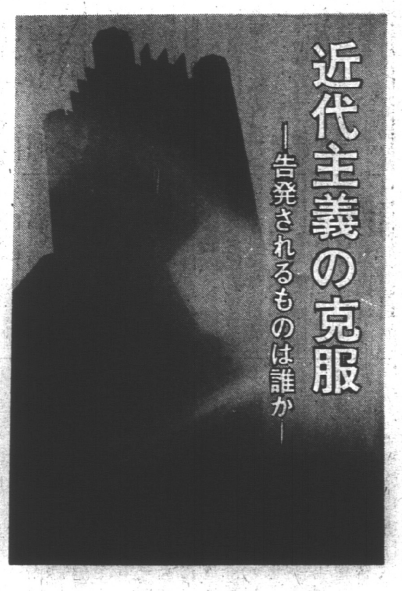
☆―☆―☆

☆―☆―☆

広告のため非表示

近代主義の克服

――告発されるものは誰か――



原野利彦

加害者の論理から

―自己否定の姿勢へ―

一、個別的闘争から普遍的闘争

「68年の大学闘争」ともいわるべき今度の闘いに関して、様々な角度からの分析が行なわれている。しかもこれらがこの闘いの意義や問題提起を見ぬくのにせい一杯である様な議論の段階である事も又一つの特徴としてあろう。従って論争があったとしても、迫力がない。目立った論争のないことは、まだまだ問題が煮つまっていないことを意味する。我々が本当に闘いにとりくんでいるか否かは問題点をうき出す能力及び論争の根深さによって判定されるだろう。私自身は今後企画されている経学、技術シンポジウムや全九州労学共催集会への主体的かかわりの中から更に問題意識を深めてゆきたいと思っている。

さて、今度の大学闘争は次のような特徴をもっているものと思われる。まず第一に表面的にはそれぞれ一応分離した発端をもつ各大学の闘争が、一つの大学闘争として共通目標を外圧的にではなくいわば内発的にもち得たことを指摘出来るだろう。つまり古田体制打倒の闘いとしてはじまった東大闘争が、医学部紛争に端を発した東大闘争と、様々な問題点を残しながらも、ともかく提携出来た事実。しかもこのような闘いが全国の学友に共感をもって受けとられた事は、漠然たる大学闘争一般という概括によってこく当り前のこととのみ見られてはならないといえよう。7・9の決定には、学友会も加わったのだから撤回する必要はない。という三者の諸君のいい分は、正に国大協路線を反体制的ポーズで補足していたことを示すものにすぎない。我々はこのような「自己規制」をすることにこそ、学問・研究の自由がある、と居直った教官達や三者の諸君の虚偽性をあばくことを運動の一つの発端としたのである。

第二に、東大闘争に典型的にあらわれた師弟、大学院生間の「講座制撤廃」、「自己カリキュラム」の運動や日大の「反大学」闘争に見られる様な、教育・研究に対する根本的問い直しの動きに注目せねばならぬ。これは九大闘争においては「教育センター建設」をめぐって起った。その際知識や技能の大切な体制化（単に学問、知識や技能は商品以外のものではあり得ず、その学問自体の構造が技術主義的に変化されていく事等の究明が行なわれていったのである。電算センター建設と機体とを機械的に分断する事によって早期建設を策した当局、しかもそれを「科学を人民の手に」という美名のもとに支えた三者の諸君の虚偽性は、学術会議の内実や研究どころの次元に明らかにされていたのである。

第三に、70年安保闘争へ進む大学闘争としてあったことを否定出来ない。東大・日大の闘いの記録からも明らかな様に、その闘いは70年安保という階級矛盾の一つの噴出口を意識しつつ、知何にしてこれに主体的にかかわるか、という事の追求でもあった。加害者としての自覚という論理を主体的なバネとしつつ、市民的生活の中に自由を見出し、この生活の自由を守れと叫ぶ自分達の虚偽性をあばき出しつつの闘いは、60年安保闘争の二つに我々の闘いを収奪せんとする者達との徹底したイデオロギー闘争の遂行がある。全学感覚での「人間の類的存在」を回復せんとするならば、この論理はゆるがせには出来まい。大学闘争におけるそれは次のような特徴をもってあらわれている。

(1)教育期間の延長は、労働力商品の担手の育成の期間の長期化であるが、それは非人間化している労働の特徴が教育の還元にあるものにも顕在化する機会の増大をも意味する。以前ならば学校外に若年労働者として多くのものが出ていったが、今は学校内に多くとどまる。後期中等教育から大学にかけての青年の目ざめは、学校内での不満として爆発する。一定の賃金をもつ労働力商品であるために、一方での生産における支配関係への服従を習慣づけるためのイデオロギー形成が意図的・無意図的に行なわれる。これは教育そのものへの反抗を招く。それは商品化されていく自身や、それをおしすすめる者への反発こその根本とする事において労働運動と相似の性格をもつとしても、それ自身が労働者の即自的要求・自分や家族の生活をすることへの執着・の事みを知らぬ闘争であるが故に、又他方でマス化し、無気力化してゆく労働者の故に学生運動が労働運動から孤立する、という事が起る。だが学生は即自的要求の重みを知らぬ経験さからがなりの観念的な認識力と実践力を保持し、変革運動への展望を開きうるという可能性をもつ。我々は高等教育の大衆化を積極的にとらえなおし、大学闘争におけるイデオロギー闘争をもっと徹底して追求せねばならぬ。だが一方学生提携を実質的におしすすめてゆく中で、労働者の即自的要求の重さとその自己変革の困難さを実感し、その中でのイデオロギー闘争のつっぴきならなさをしっかりと身につける必要があるだろう。しかもそれは教育目的や教育内容をめぐっての闘いを基軸にすべきであって、決してそれらをカッコにくくった外での闘いであってはならぬだろう。（自主講座、自主カリキュラム、反大学の構想を再度思い出してみよう。）即ち教育を階級闘争の場としてとらえ、更にそれがすべて人間を舞台とする闘いであるが故に、階級闘争における政治主義的傾斜をチェックする働きをもある程度なしうるものとしてかちとらねばならぬ。

(2)科学的・技術者としての道歩み出した東大の院生・助手の闘いと見られる様に、自分を知識労働者として自覚しはじめ、従来の真理の像としての超階級的な彩りをもつ知識人という虚偽のベールを最後的にはとろうとしている。知識という商品を生み出す労働力商品としてそれも独立した生産者的な知識人ではなく、学校、大学に組織され一括してその親方である国家から管理されることになって独占資本の体制に完全くみこまれた労働力商品としての自分を否定し去ろうとしている。この事も一つの特徴として確認しておかねばならぬ。

(3)これら教育・研究における闘争は次の四つの観点からみ分けられるだろう。①第2次大戦後世界的に顕著になった独占資本体制への教育・研究の完全なみこみ込みの一つに我々の闘いを収奪せんとする者達との徹底したイデオロギー闘争の遂行がある。全学感覚での「人間の類的存在」を回復せんとするならば、この論理はゆるがせには出来まい。大学闘争におけるそれは次のような特徴をもってあらわれている。

(1)教育期間の延長は、労働力商品の担手の育成の期間の長期化であるが、それは非人間化している労働の特徴が教育の還元にあるものにも顕在化する機会の増大をも意味する。以前ならば学校外に若年労働者として多くのものが出ていったが、今は学校内に多くとどまる。後期中等教育から大学にかけての青年の目ざめは、学校内での不満として爆発する。一定の賃金をもつ労働力商品であるために、一方での生産における支配関係への服従を習慣づけるためのイデオロギー形成が意図的・無意図的に行なわれる。これは教育そのものへの反抗を招く。それは商品化されていく自身や、それをおしすすめる者への反発こその根本とする事において労働運動と相似の性格をもつとしても、それ自身が労働者の即自的要求・自分や家族の生活をすることへの執着・の事みを知らぬ闘争であるが故に、又他方でマス化し、無気力化してゆく労働者の故に学生運動が労働運動から孤立する、という事が起る。だが学生は即自的要求の重みを知らぬ経験さからがなりの観念的な認識力と実践力を保持し、変革運動への展望を開きうるという可能性をもつ。我々は高等教育の大衆化を積極的にとらえなおし、大学闘争におけるイデオロギー闘争をもっと徹底して追求せねばならぬ。だが一方学生提携を実質的におしすすめてゆく中で、労働者の即自的要求の重さとその自己変革の困難さを実感し、その中でのイデオロギー闘争のつっぴきならなさをしっかりと身につける必要があるだろう。しかもそれは教育目的や教育内容をめぐっての闘いを基軸にすべきであって、決してそれらをカッコにくくった外での闘いであってはならぬだろう。（自主講座、自主カリキュラム、反大学の構想を再度思い出してみよう。）即ち教育を階級闘争の場としてとらえ、更にそれがすべて人間を舞台とする闘いであるが故に、階級闘争における政治主義的傾斜をチェックする働きをもある程度なしうるものとしてかちとらねばならぬ。

(2)科学的・技術者としての道歩み出した東大の院生・助手の闘いと見られる様に、自分を知識労働者として自覚しはじめ、従来の真理の像としての超階級的な彩りをもつ知識人という虚偽のベールを最後的にはとろうとしている。知識という商品を生み出す労働力商品としてそれも独立した生産者的な知識人ではなく、学校、大学に組織され一括してその親方である国家から管理されることになって独占資本の体制に完全くみこまれた労働力商品としての自分を否定し去ろうとしている。この事も一つの特徴として確認しておかねばならぬ。

(3)これら教育・研究における闘争は次の四つの観点からみ分けられるだろう。①第2次大戦後世界的に顕著になった独占資本体制への教育・研究の完全なみこみ込み。②教育が労働力商品の再生産過程他ならぬ事、機械としての教育と機械としての教育が労働市場における他の労働力排除と体制内での地位争いの別名にすぎぬ事が自目のもとにさらされていること。知識又は知識人を知識労働者としてとらえ、それが一個の労働力商品にすぎぬことの分析。③教育闘争の戦略・戦術の検討④教育・研究の認識論的次元人間論的検討――教育学、学問論における近代主義との決別。以上である。だがここに気付くことは①・③の分析が曖昧に行なわれている反面、④の検討はほとんどなされていない様に思われる。しかこれには次のような理由からも十分とりくまねばならぬだろう。

二、労働力商品再生産過程としての教育

つまり我々の前に提出されている課題は、日共、民青の醜悪な裏切りと進歩的教育の仮面をはいだ。（我々がようやっとこの九大闘争はほとんどかかる闘いを効果的に生み出し得ないでいる。）だが我々がこのおぞましい事件と同じロジックを踏んでいる様に思われるのである。言動の表面的な相異は採用におけるロジックの相異を証拠立てることは出来ない。

教育の近代化は（独占資本のイデオローグは「現代化」とよんでいるが）学者に対しては「自発性」にもとづく教えこみ――いわゆる「教育の現代化」機械化を基礎とする発見学習」等、研究者に対しては、オリジナリティーの充分な開花の為の研究条件をとり繕ってすすめようとしている。何を「発見」するのか、何の為の「オリジナリティー」か。独占資本への自発的従属の道は装い新たにして開かれつつある。「学生参加」の偽瞞性をどこまで見ぬき自を我々はもっている。

更にこの近代主義は、知識人論にもあらわれる。知識技術者はその本来目指すべき普遍性と今置かれている個別的利益への服従という事との矛盾に気付く時、知識人たち同様の構造をもって自らの要矢を感じている労働者と連帯は出来るが、所詮は如何なる階級にも属さない、というアポリアを抱えての分業体制への居直り、がそれである。

次に、労働者や学生の大衆化、及びそれに迎合し形式民主主義に排撃する共産・民青、そして進歩的知識人。彼らの不毛性の裏返しとしての「オリジナリティー」を振かわす立場。我々が居ないかどうかのきびしい自己点検の欠如が言われねばならぬ。労働者や居住へのしがらみを噴出するアクティブや沖縄をまえ上回避、革新主流、グラ幹の裏切り、という上方分析出来ぬ我々は、一体如何なる立場に立っているのか。全軍労の「脱」感覚、2・4法案粉砕リゲード封鎖の中での全体討論の中での我々の職歴水準の正直な発表にすぎないのである。

我々は何に「今の自分は果して加害者の立場に立っているのではなかろうか？」と問う事によって、安直な意味での階級闘争敗北を行なおうとする姿勢をこの闘争において養いつつある。この自己否定の姿勢が自分を裏付かせる根底において近代的な「我」――つまり私有制に規定された私への居直りとしてあるとしたらどうなるであろうか。我々は正しい歴史的・社会的分析と同時に、近代主義を認識論的に、人間論的に克服しゆく主体をつくり上げて行かねばならない。さもなければ「革命」物に対化をおしすすめゆくに至ぬ果しない「内ゲバ」と内部粉砕がつづくだけであろう。なぜならば戦術上の過誤に所詮それ以上でも又それ以上のものでもないのだから。

（はらの・としひこ・教育学部・教育哲学科博士課程）

（カット・宝真）2月7日朝岩田講堂

広告のため非表示

受験生特集

戦後のベビーブームも峠を越え、民主化されたと言われる教育の過密もしだいに過疎の部分を生み出している。しかし大学入試では、現役志望者の漸増と浪人の蓄積で、現在の過密が解消される見通しはない。従って高校の予備校化とその中での歪んだ人間性の形成も止むことはない。

我々は我々自身の主体性を追求していく生活の中で感じとってきたものを、大学生活に憧景を抱く受験生諸君に示した。高校教育を中心として大学を、又それを包摂する社会を、諸君を中心として諸君の回りに拡がる世界を示そうと試みた。

我々はその過程で、我々自身の立場のあやふやさを痛感した――諸君の立場を諸君自身に示そうと方針を立てたにも拘らず。

我々教養部支局員が少数の上試験と重なった点もあるが。

受験生諸君のさえた頭で行間の意を汲み取ってくれるよう願う。

（教養部支局）

1 体制の中の受験生

受験生に、言い古された言葉ではあるが「受験戦争」という言葉を今一度思い出していただきたい。受験戦争の最前線である試験場で苦悩の者の気持はどんなったか。おそらく周りの者が皆敵に見えたことなろう。だが人間相互の対立という皮相的な見方をやめ、このような情況を強いられる社会の仕組の中の自分というものを見つめてもらいたい。

現在高校は大学の予備校化している。現在の高校は大学入試のために機能しているといっても過言ではない。補習授業や○×式の多量のテストのみでなく教育内容も又然りである。それは断片的知識の詰め込みという形で行われる。大学入試に必要と思われる語句があらかじめ大学で印刷された教科書を購入し、生徒はそれをなるべく多く暗記する。その結果は度々のテストでためされ、上位の天才か狂人でない限りその背景を勉強しなければ内容を深化させず、又応用して新分野に踏み込むということはまず。大学入試に関係のない科目については意欲のないまま聞かれはならず、教師も一部の者だけを対象とするという無味乾燥した授業が繰返される。その中で生徒は朝早く登校し補習から正課へと誘き出、一日の義務を無事終えたといわんばかりの安堵感を漂よわせた顔をして帰宅を急ぎ、同窓生の目を盗むようにして克苦勉励する。教師は教師で、テストのみを印刷に追われ、クラスにとけ込む暇はない。生徒の方も前述のように日常の中で、問題意識の不明瞭なまま教師とは不毛の接触を強いられる。そこには心の触れ合いはなく、指導と服従のみが存在する。現在の学校のマスプロ化はそれを一層激くする。家庭も教育ママの闊歩する兵站基地と化している。かくして生徒はあらゆるものから分断されて孤独となる。

与えられた物の暗記や内容に問題のある勉強のみに時間をとられる事で、社会の動きや人間性の成長からとり残されることになる。暇も友人もない生活は人間の性格形成に片寄りを生み、それの醸成した不安は受験戦争の中の競争へとのある勉強のみに時間をとられる事で、社会の動きや人間性の成長からとり残されることになる。暇も友人もない生活は人間の性格形成に片寄りを生み、それの醸成した不安は受験戦争の中の競争へと解消される。

かくて蓄積された知識は三年めに排泄の場を与えられる。それが入学試験である。国立大学では五科目、私立大学ではそれ以下の科目数で、入学の可否が判断される。いかにも世間向きの大味なやり方である。九大の場合、これによって受験生の三割が入学でき他は拒否される。しかたなしに入った人にも、意欲を持って入った人にも（意欲の内容は問われない）等しく、ある点数以上点をとったということで大学生の肩書が与えられる。「この激烈な受験戦争を勝ち抜いて来られた！」という錯覚が呈せられる。だが点数は、彼が大学にふさわしい人物たるか否かを示すものではない。はっきりと目的を持ち地道な努力をしても点数が足りなければ落ちるし、問題の傾向でも落ちることがある。又その反対もある。この背後には、高校教育の形骸化と同様の価値観があり、それは人間の画一化を意図する。合格者は当然落第者のことを気にすべきである。

ほとんどの合格者はそのことに多分無頓着であろうし、又良心に痛みを覚える少数の者も「自分はいくらかその犠牲がある」と自己を合理化してしまうだろう。先の贅辞の中にも、この合理化の中にも一様に見られるのは主体性のなさである。無意識的にか意識的にか、自分の悪業の立場を現実の矛盾の中に置いている。野放し状態におかれている受験戦争の背景を考え、その動機に対する自分自身の価値体系を新たに構築し、そこに自分の立場を見い出すのでなく、現実の事だと耐えかねた姿がそこにはある。与えられるべきは教育ではなく予備校的高校教育及び受験戦争を生み出す体制の論理に根差された主体制を欠く彼らへの憐みであり、行われるべきは自己の合理化ではなく客観的現実の事実に目を背け抜くことである。情況への埋没とそこにおける自己の合理化による主体性回復の努力は、意識的しか無意識的しかろこの我々は七〇年の安保条約期に対する最前線基地としての要求を押えていたが…。

2 基地闘争に見られる政治的中立

去年の六月二日夜、九大構内に建築中の電算センターに板付基地から飛び立った米軍ジェット機が墜落した。大学当局は生命の安全と学問研究のために、板付基地撤去を唱えて抗議行動に立ちたった。一方学生は板付基地の存在基盤である安保条約の破棄・粉砕を叫んで、同じく抗議行動を行った。政府はそれに対し参議院議員選挙用に板付基地の移転をもち出し、ベトナム及び朝鮮・中国に対する重要基地板付を国民の目になるべく他の場所に移すような楽観的な見せ方をした。しかし、それにもアジア大陸に対する最前線基地としての要求は押えていない。

大学当局は安全確保論議でもって板付基地の撤去を要求した。即ち、板付基地から飛び立つ米軍ジェット機は常に墜落の危険をはらんで、それは大学当局の政治的立場と天の稚力機構を構成するというのは、政府はそれ故に基地撤去闘争を徹底的に切崩し、弾圧する。政府の巻き返しの最たるものとして学問研究のための機能を犠牲にしてまでも、板付基地撤去闘争センターを真っ先に使っての圧力があり、大学当局が簡単に屈して醜態を演じたのは周知の事実である。国家権力の強大さ（即ち現体制維持能力の大きさ）を示すにはこれだけで充分であるが、我々自身の問題としてとらえた場合、その体制維持の一機構として我々に敵対してくるものに大学当局がある。

大学当局は安全確保論議でもって板付基地の撤去を要求した。即ち、板付基地から飛び立つ米軍ジェット機は常に墜落の危険をはらんで、それは大学当局の政治的立場と天の稚力機構を構成するというのは、政府はそれ故に基地撤去闘争の存在に恐怖を感じるとき、他の大学に対する抑圧を強めるであろう事を予想する。政府は基地撤去闘争を一部の者の過ちであるとして、大学当局に対し、「政治的中立」の旗を掲げて、学問研究の場を犠牲にしてまでも、板付基地撤去闘争センターを真っ先に使っての圧力に屈した大学側は、政府の巻き返しの最たるものとして学問研究のための機能